

# TEEP

進化型実務家教員  
養成プログラム

VOL.25

NEWS LETTER

## 進化型実務家教員養成プログラム・シンポジウム

### パネルディスカッション「実務家教員の最前線」

「産業界と大学の架け橋 実務家教員が担う役割」をテーマに、2021年11月18日に進化型実務家教員養成プログラム(TEEP)のシンポジウムとワークショップを開催しました。今回のニューズレターでは、シンポジウムの中で行われた4名の実務家教員によるパネルディスカッション「実務家教員の最前線」の様をお伝えします。

#### 登壇者

- 笹野 寛** —— 名古屋市立大学 医学研究科 (先進急性期医療学分野) 教授
- 吉住隆弘** —— 中京大学 心理学部・心理学研究科 教授
- 葛原憲治** —— 中京大学 スポーツ科学部・トレーナー学科 教授
- 今永典秀** —— 名古屋産業大学 現代ビジネス学部・経営専門職学科 准教授

#### ファシリテーター

- 鵜飼宏成** —— 名古屋市立大学副理事・大学院経済研究科教授  
TEEPコンソーシアム実施委員会委員長

**鵜飼** まずは、お一人ずつ自己紹介をお願いします。



**笹野** 名古屋市立大学の笹野です。救急科の医師として大学病院で働いています。患者さんの治療、若手の指導に加え、10年ほど前から臨床現場(手術室、ICU、病院等)を再現した設備の中で医療者がトレーニングを行う「臨床シミュレーションセンター」の管理者も務

めています。センターで行われる心肺蘇生の講習会や、救急医療に関する実技を含んだ講習会のインストラクターも行っていきます。

TEEPの減災・医療コースで養成する実務家教員は、例えば救急救命士など、医師以外で大学病院で働きつつ、研究・教育をする人材と考えています。南海トラフ地震に備えた人材の育成を進めていくことが、名古屋市立大学の重大な役割の一つです。職種・組織横断型のリーダーを創出したいと考えています。



**吉住** 中京大学心理学部の吉住です。専門は臨床心理学で、特に福祉領域と教育・学校領域に軸足を置いています。大学の心理相談室、保健センター、病院の精神科で勤めた後、ホームレス状態にある方や生活保護受給者の支援に関わり始めました。近年は子どもの貧困問題に関心をもち、生活困窮世帯の子どもの学習支援を名古屋市と春日井市で10年ほどやっています。名古屋市の子どもの権利相談室の権利擁護員でもあります。実務家として心がけていることの一つ

スタートラインにつけたかなと感じました。

スポーツの発展には、プロスポーツやトップアスリートの研究が不可欠です。アメリカではメジャーリーグのコーチやトレーナーが論文を書き、競技力の発展に貢献しています。日本にはまだプロスポーツやエリートアスリートの身体・体力特性についての研究はほとんどありません。私たち実務家教員は、現場と研究の橋渡しの役割を求められていると感じます。

**今永** 研究領域は縦割りですが、ビジネスの現場は縦割りではありません。「学際的」であることが当然です。実務家教員に求められるのは、学問領域の縦と横を結びつける、ビジネスが理解できる人です。ですから、実務家教員の関わる学問分野はどうしても広い領域になります。

実務家教員が社会で実践をしながら、Win-Winなものを作っていくことが大事です。大学にとっても、企業にとっても、学生にとっても学びになり、発展につながる知見を得られる関係やプロジェクトを作ることです。実務も教育も研究も社会貢献も統合するイメージです。

**鵜飼** 社会的に必要なところ、求められているところで実践の場をつくり、中でも、社会の課題解決につながっていくような経験を積極的に積み重ね、経験の幅を広げると同時に深めていってほしい。そんな実務家教員の実態が垣間見られますね。

### 実務家教員として働く魅力とは

**今永** 私は実務家教員として働くことは、得がたい貴重な経験だと思っています。実務家として、大学の教員としての役割も持つからこそ得られる魅力を、皆さんはどこに感じておられますか。

**吉住** 大学教員の職があると、何かやりたいとき

に外部の方がお話を聞いてくれるのは大きいと思っています。やりたいことを形にするため地域に働きかけるときに、まずはその場自体が与えられるように思います。

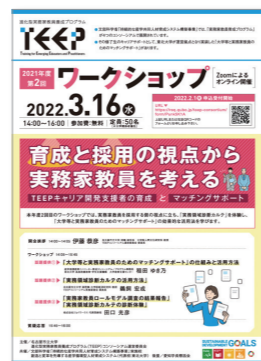
**笹野** 若い研修医の先生が立派に育ってくると、とてもうれしいというのがあります。大学ならではの活動の場も与えられます。いろいろなところで講演させていただいたり、海外留学の機会もいただけました。

**鵜飼** 私も実務家教員の一人として少しお話しさせていただきます。

私の専門は起業家教育や、社会課題の解決をビジネスの手法で行う人材を育成することです。ですから実践の場づくりが非常に重要です。先生方がおっしゃられたように、実践の場を自ら生み出し、教育指導方法としては「教え過ぎない」ことを心掛けてきました。

近年、学生時代に体験したアントレプレナーシップ教育の学びをいかして起業する人間が増えてきました。起業した元・学生たちが大学に来て、今度は後輩たちを教えている。社会との循環が生まれてきたのです。以前は、本当にこれが大学教育なのか、どのような研究スタイルが望ましいのかと悩み続けておりました。しかし次代を担う人材を育成するという視点に立てば、我々も非常に大きな役割を果たせます。育成の現場に実践の知を相当数入れられることはストロングポイントになります。

ストロングポイントを体系化していくというところは、今後研究・教育の両面で、共同して成果を出していく必要があるところだと思います。今回は問題提起にとどめまして、近い将来、また同じメンバーで、こうなったという成果をもって報告できる場を作りたいと思います。



2022年3月16日(水)に「TEEP 2021年度 第2回ワークショップ」を開催します。テーマは「育成と採用の視点から実務家教員を考える」です。申込方法など詳細については、Webサイトにてご案内させていただきます。  
<https://teep-consortium.jp/>



は、心理職の裾野の開拓です。学習支援や子どもの権利相談室は、一般的には心理士の働く場所としてイメージされていません。こうした領域で心理士の視点がどういかされるかを、後進を育てる際にいかしたいと思っています。

もう一つはソーシャル・アクションです。心理士は相談室に来た方を支援することに加え、今後はこちらから出かけていく「アウトリーチ」活動や、自ら活動を起こすソーシャル・アクションも必要です。学習支援事業では、名古屋市・春日井市の行政の方と一緒に子どもたちに必要な場を立ち上げました。



**葛原** 中京大学スポーツ科学部の葛原です。私はプロスポーツチーム・企業チームでアスレティックトレーナーとして仕事をしてきました。チームドクター・監督・コーチと連携しながら、選手のサポートをする仕事です。

私はアメリカの大学院に留学し、大学スポーツでトレーナーとして活動するとともに、スポーツ大会でのメディカルスタッフとしても経験を積みました。日本に帰国してからも、プロ野球や企業スポーツチームのトレーナーを歴任しました。

その後大学教員になりました。「面倒見のいい大学」を標榜する私学は非常に多くあります。しかし、教職員が学生のためにお膳立てをし過ぎて学生が自立できないといった状況も散見され、ジレンマを感じています。



**今永** 名古屋産業大学の今永です。私は信託銀行に勤めた後、不動産会社に転職し、その傍ら市民活動団体を設立し仕事外の時間に活動していました。平日の夜や土日に、学生と社会人がキャリアについて語り合う、座談会のような活動です。これを楽しんで続けていたら、岐阜大学の「次世代地域リーダー育成プログラム産業リーダーコース」を設立・運営するお仕事に携わることになり、インターンシップや産学連携の仕事を始めたことが、実務家教員としてのスタートです。

その後、名古屋産業大学の経営専門職学科で、インターンシップや実践的な経営全般に関連する内容の

講義を行なっております。

## 実務知を活用した教育とは

**鵜飼** それでは皆さんに、2つの論点についてうかがいます。

1つは「実務知とは何か、学術知との関係とは」。「実践の理論」を皆さんはどうお考えになっていますか。

併せて2つ目の論点として、「実務知を活用した教育実践指導」についてもお聞きしたい。実務でのノウハウや、文字にできない知をどう教育訓練されているのでしょうか。

**笹野** 私は、学術知は実務知の奥にあるものと考えています。実務で感じた疑問を研究テーマにすることで生まれてくるものが学術知ではないでしょうか。

教育実践指導については、臨床シミュレーションセンターでの経験をお話します。病院の中で医師が最初に教育を受ける時には「See one, Do one, Teach one.」と言われる。上級者のやり方を見て、自分もやってみて、それを人に教えられるようになれば良いという考え方です。しかしこの方法を実際の患者さんを相手に行うことは医療事故の原因にもなりかねません。そのためどうしても経験が少なくなります。その点シミュレーションであれば何度でも反復して練習でき、エラーが起こっても有用な学びにつながります。

また、シミュレーションを利用した講習会では、知識・技能の普及と教育方法の工夫・改善が同時にでき、教育を通じたインストラクターの自己研鑽にもつながります。「Teaching is learning twice」、教えることはもう一度学ぶこと、という経験ができます。

**吉住** 実務知という言葉聞いたときに思い浮かべたのが、哲学者の中村雄二郎さんの「臨床の知」です。「科学の知」が論理や普遍性を重んじるものとする、「臨床の知」は多義性、象徴性、個別性を重視するものです。

私たちが支援者としてクライアントと関わる時に起きる現象は、一度限りの現象であったり、実証性が得られにくいものです。しかし、積み重ねる中で見えてくるものがあります。臨床心理学とはそうした「臨床の知」を重要視します。

「臨床の知」はテキストでは学べません。現場のリ

アリティは実務の中でこそ経験できるものです。臨床教員はみな大学外にもフィールドを持ち、教育と実践の両方を担っている方が多いように思います。これが教育実践活動にもいかされます。授業で自分の実践知である臨床経験を話すと、学生たちは目を輝かせて聞いてくれます。

また、知識や経験をアップデートし続けることは、大学教員にとって不可欠です。常に実践に半分軸足を置いておくことで、社会で何が問題になっているかを、身をもって経験できます。

私の場合は心の問題を扱いますが、クライアントと会うと、背景にある社会構造の問題が非常に大きく影響していると感じます。個の問題と社会の問題、両方を頭に入れておく必要があります。それを学生にも伝え、臨床心理学やカウンセリングについてもっと広い視点を持ってもらいたい。学生の中には、私のフィールドに自ら参加し、フィールドを通して臨床の知を自ら経験していく人もいます。

**葛原** 現場で発生している事実や問題を探究し、問題解決につなげることが重要です。

私は現場でアスリートから多くを学びました。自ら考え、判断し、実行する。うまくいかなければ、また自ら考える。これができるのがトップアスリートです。また、コーチからいろいろなことを学びました。まず教え過ぎない。選手が求めるときにのみ適切なアドバイスを。選手のプロセスを重視し、選手自身に考えさせるよう仕向けるのがコーチの役目だということです。

これらを踏まえ、現在、学生にはゼミで現場実習に挑戦してもらっています。座学で学んだ知識を、応用力に変え実践力を身に付けることを目的に、トレーナーやスポーツコーチ、または保健体育の教員としての実習に取り組んでもらっています。

**鵜飼** どの分野でもシミュレーションという概念が非常に重要ということ、そして、専門分野によって臨床の場のつくり方は違ってくるといった実態が見えてきました。

**今永** 私は大学、企業、学生と異なる属性の人に対して、実践でニーズに応じてきたという面が大きいです。企業での経験から得られた営業力、企画力、調整力といった能力をいかしてインターンシップやPBLの教育に携わってきました。そして教育指導の実践を研

究にいかすことで、自分自身も成長するサイクルです。

実務家教員は実践に長けたベテランが多いのですが、私の特徴として、学生との接点や近い距離感をいかして、学生たちと同じ目線に立ち、寄り添いながら実践に携わらせることがポイントになります。

先ほど葛原先生が「教員がお膳立てをし過ぎてしまう」問題について話されました。この点はとても大事な視点だと思っています。インターンシップやPBLで教員が果たす役割は、学生に機会を与えつつ、学ぶ意欲に火をつけること。教員にはコーチ的な役割に加え、その学生に合った環境やプログラムを提供し、実践経験を積ませることや、モチベーションを向上させることが重要です。

## 現場の課題を研究テーマに

**鵜飼** 実務家教員の研究力の特徴についても伺います。研究のあり方についてはどう考えられておられますか。

**笹野** 実務家教員の研究はやはり実務の改善のための研究です。実務の中での疑問を研究テーマにすることが特徴ではないでしょうか。

**吉住** 私も学生時代に指導教員から「研究テーマは日々の実践の中で見つかるもの」と言われました。実践の中で見つかったテーマはやはり実践的なものになりますし、だからこそ継続できていると感じています。自分の場合はそれが貧困の問題でした。

また、実践の中で研究テーマを見つけたら、今度は研究の知見を実践のフィールドに戻す必要もあります。加えて、私は研究の結果に対する責任も同時に負う必要があると考えます。研究結果が誰の利益になるのかということです。結果が思いもよらないところで使われることもあり、特にマイノリティの方を対象とした研究の場合は、こういった使い方をされるのかを気にしながら世に出す必要があります。

**葛原** 私が前任校に着任したときには、学内に実験室や測定機器が全くありませんでした。そこで、スポーツ現場で取ったデータを活用するという方向に舵を切りました。トレーナー時代に取ったデータを活用して論文を書き、科研費の獲得につなげました。研究費をいただいて、ようやく学術教員の先生方と同じ